

伊達千広の歌論・神観・歴史観

明治神宮教学研究センター研究員

佐藤 一 伯

一、はじめに

幕末期の紀州藩士で本居大平に学んだ伊達千広（宗広¹）の主著『大勢三転考』（以下『三転考』と略記）は奥書によると嘉永元年、当時四十七歳で藩政に携わりつつ職務の暇をみて記されたものであり、明治六年養子伊達宗興・実子陸奥宗光の希望により福羽美静の序文を付して刊行された²。その後大正年間に内藤湖南が『三転考』を紹介し³、松本彦次郎が『史学名著解題』でとりあげ⁴、以来坂本太郎が江戸時代の歴史学の総決算と評価したこと⁵に象徴されるごとく、わが国の歴史思想上不可欠の書として位置付けられ研究が進められてきた⁶。

今日『三転考』の叙述や歴史思想に関しては、既に先学諸氏の研究によってその輪郭がかなり明らかにされつつある。すなわち歴史叙述の特色としては、考証学的方法をもとに政治的社会的制度を基準とした時代区分がなされ、各時代の歴史的個性性と時代推移の歴史的必然性・不可逆性（時勢）が認識されている。そして歴史思想においては不可知論的な立場とともに、特定の時代の尚古・復古を主張せず時勢の洞察から冷静に歴史事象を把握する姿勢（石毛忠氏は「現実的応変主義」と定義された）がみられることが指摘されている。

しかしながらこのような歴史思想の形成要因、就中千広が学問的に最も深く関わったと思われる国学の影響の有無については、先学において意見が分かれている。例えば小沢栄一氏は『大勢三転考』自体が、それに拠ったとみずから言っているように『古事記伝』における氏姓制の詳細な考証的研究成果は、千広の歴史世界の通観的把握の中に独特の意義を主張し得る構造として、映じて生かされた」と指摘し、松本三之介氏は、

国学では、「漢流の議論理窟」を離れて所与をそのありのままの姿において認識し、受容することを尊重したのである。そこでは、個別多様なものが個別多様な姿のままに尊重された。……時代変遷の観念がそこに生れたとしても、決して不思議ではない。千広の歴史観にこうして国学的な物の考え方が流れ込んだと見ることはできないであろうか。⁽⁸⁾

あるいは、

国学者たちの、こうした「理」の普遍性（「天理」「天道」）に対する拒否が、人間の「実情」や「真情」への理解を可能にしたように、千広においても、歴史の総体を貫く「理」を不可知の世界へ押しやることによつて、じつは逆に、「時の勢」という歴史の個別性と、その相互間の関係を押さえることが可能になったのであろう。⁽⁹⁾

として、時代区分とその根拠となる時勢観の双方において、国学との関わりを指摘している。

一方、石毛忠氏は、『三転考』における「天神」「神」「惟神」「神隨」等の語の使用状況を検証し、それらがいずれも『記紀』からの引用や実質的な意味を持たない比喩的表現であることから、千広は神々を常に歴史の展開に関与する存在とは考えておらず、よつて世の有様を「みな神の御所為」とする国学的時勢観とは同一視できないとしている。⁽¹⁰⁾ 千広と国学との関わりについては石毛氏が、『三転考』の本質にかかわる重大な問題⁽¹¹⁾と位置付けており、今後十分な検討を要するであろう。

さて千広における国学の影響如何が問われる場合、従来主として賀茂真淵や本居宣長の思想との比較が試みられて

きたが、一方で『三転考』が宣長没後（享和元年）五十年近くを経て成立したという時代状況を考慮に入れる必要があると思われる。とりわけ千広においては、文化・文政以降に隆盛をみる紀州本居大平門の国学との関わりが重要となろう。そこで本稿ではこの問題を解く手掛りの一つとして、千広が藩政に携わっていた時期に本居大平門で学んだ和歌や神観について考察し、そこにみられる思想と『三転考』の歴史観との関連を検討してみたい。

二、歌学への覚醒

紀州藩と国学との関わりは、天明七年に本居宣長が第九代藩主徳川治貞の命に応じ『秘本玉くしげ』を、前年著わした『玉匣』と共に奉呈したことに始まる。ついで寛政四年、第十代藩主治宝は宣長を五人扶持で召し抱え松坂居住を許可した。その後宣長は寛政六年・十一年・十二年の三度和歌山を訪れ、藩主御前で講釈を行なっている。宣長の後を継いだ大平は文化五年十二月（五十四歳）に治宝に和歌山移住を命じられ、翌六年六月に松坂から和歌山へ移った。以来大平は『紀伊統風土記』の編纂に参画し、傍ら度々藩主に『万葉集』『源氏物語』『百人一首』『古事記』等を講じている。紀州に本居派国学の隆盛をみるにいたるのは、大平の和歌山移住以降である。

千広が大平門に名を列ねたのは文政二年、十八歳の時である。彼は大平に入門するまでの経緯について、長文に
なるが次のように振り返っている。

おのれ幼なきころは学問を好まずして、七歳の年より師につきて読書を習しかど記憶なくて、十ばかりまで四書を四たびまでくり返し読たれどたゞ同じさまに忘れがちにて、はかばかしく読みつゞくる事も難かりける。さるからに軍物語などを好みて、七ツの年はじめて絵本太閤記を読みより、盛衰記・太平記などはいふも更なり、漢楚軍談・三国史などのから物語、其餘書肆の持くる小説草紙大かたの書ども見ざるはなく、……一度目をすくれ

ば事歴人名記憶一つも違ふ事なく、幼年にしてはめづらしなど人もいひけり……さる程に詩を作る事を習ひて、漢文は初山踏のいとたどしきに、詩作る事のいとおもしろくて、夜となく日となく是に心を寄ざる時なかりしを、十八の年人語るをき、しに、物徂徠先生の詩を騎陽舶来の詩人のみて、詩は美なりされど歌ひがたしといひしを、徂翁の聞れて、彼らが何を知るべきぞと嘲りの、しりといふをき、てつくづく思ひみるに、才識の方よりいはゞげに徂翁の嘲られし如くあるべけれど、音聲詠歌の上にては歌ひがたしといへるもさる事なりけむ。か、れば詩はよく作り得てもかれが音聲に達せずばいたづら事なり。和歌は我國振なり。勉て歲月をつまば、あるひは先達の脚下にも至るべし、詩は歌にしかじと心一ツに思定て、やがて本居大平翁に名簿を贈りて其門に入りしなり。是千広が歌学の事のもとなり。⁽¹²⁾

ここで注目されるのが、千広が幼少の頃四書に馴染めず、専ら『太閤記』や『太平記』等を好んで読んだということ、漢詩に興味をもち後に和歌に転じたということが、彼の中で一連の流れとして語られている点である。つまり幼少の頃歴史物語に親しんだことで、彼は歴史的教養を育んだであろうし、その意味で後年の『三転考』執筆に繋がる彼の歴史家としての片鱗を窺うことのできる逸話であるが、それは一方で多分にその物語的な要素への興味を意味するものであり、和歌を志すに至る言わば文学的方面への開眼をも準備したのが、やはりこの少年期に読んだ歴史物の数々だったのである。

さて「国振」の自覚から和歌を志した千広は、師大平のもとで如何に歌を学んだのか。千広は文政五年（二十一歳）に目付を仰せ付けられ、翌六年と十年の二度、松坂詰を命じられている。そして二度目の文政十年の勤務の時に『浜萩日記』という紀行文を著している。

大平翁の家の月次の歌を旅出やあやと事しげきにまぎれて行よまざりしを思ひいで、よみてやる。まず弥生のは、

河上歌

吉野川桜ちるらし雪をのせて

くだす筏師袖かをる也

この歌をかくとて思ひ出たるに、この春吉野川にて筏師を見て

吉野川春は桜の花と、もに

名にながれたる川のいかだし⁽¹³⁾

以下四月・五月・六月の題詠が綴られている。また文政十一年には、藩主の江戸からの帰りを迎えに和歌山を發ち、道中に紀行文『幣帛袋』を著している。

いでやわが木の国より江戸にいたるまで古のゆへある蹟今も名高くけしきあるところいくぞはくならむ、それを尽く書つけなむにはめづらかなる家つとなるべけれど、もとより風流なる旅路ならねば、けしきある浦まにも足をとゞめずおもしろき山べにも駒をたてず、大かたにのみ見過しゆけば何事か心に残らむ、……紀行などおもひかまふるにもあらぬを、つぎつぎかきもてゆけば猶何かしの日記などいはむさまなる、いと人わらへなる筆すさびかも、此ぬさふくろは藤垣内翁の馬のはなむけに歌かきて賜へるなり、其歌、

もみじ葉は秋の山路にます神も

めづらしと見む君がたむけを

とぞしるされける、⁽¹⁴⁾

このように二編の紀行文は、いずれも藩の職務を伴う旅の暇に記されたものである。かつて本居内遠が千広について、「学を好めども……近來は公務によりてまぎれたり」と評した⁽¹⁵⁾ように、千広の「歌学び」が多忙な藩務の制約の下に営まれていたことが窺われる。

しかし一方で千広は同じく紀州大平門で学んだ長沢伴雄をして「雅にも俗にもよく通じて物語る、人、千広ばかり

りなるはおほくのえがたきこと」と評させたように、勤務の多忙にまぎれて学問を疎かにしたのではなかつた。晩年の明治六年、三條実美より「和歌宿老」の染筆を賜つた千広は陸奥宗光宛の書簡でこう述べる。

抑十八才之時より和歌之道に入候て古希余一之今日に至り、かしこくも美號を賜り候事、生涯之本望後世之光輝不堪感涙候事⁽¹⁷⁾に候、

自ら和歌を志して以来明治十年に歿するまでの六十年に及ぶ営みが、彼にとつて如何に思い入れの深いものであつたかは言うまでもない。その礎は藩務の暇の絶えざる研鑽によつて築かれたのであつた。⁽¹⁸⁾

三、柿園派歌論と千広

本居大平が鈴屋の学統を継ぐに及び、鈴屋系統の中で歌風や歌学の見識を異にするものは少なくなかつた。その一人に加納諸平がいる。

諸平を中心とする歌人は彼が「柿園」と号したことから「柿園派」と称するが、その歌論は同門の伴林光平が著した歌論書『稲木抄』に受け継がれている。「歌詠まむとおもはむ人、まづ詠歌の目標を定め、次に題を定め、さて意趣・言辞・声調の三をよく選び定め、生活を失はず、精神をたくましくして、秀吟・名歌うめき出づべきことなりかし⁽¹⁹⁾」というのがその結論だが、まず「目標」については、

其の主と誦み習ふべきもの、先づ古事記日本紀に見えたる歌等、さては万葉集などなるべし。すべて上代は人情質直にして、軽薄なること露ばかりもなかりき。故に其の諷み出せる歌もみな人の心情より出でて、人情の至極を文なして諷み出でたるものなれば、其を誦めば人情自然実に移り、淳朴に移りて、おのづから家を齊へ身を修むるに至る。是我が学にて心情を離れては歌てふ者もなく、歌を離れては皇国の大道も知らるまじき理也。……

歌詠はむもの、先づ此の理をよく弁へ記紀・万葉集等の古歌を誦み習ひ、皇国固有の真情をもて歌の宗致と定め其を目標として勤め学ぶべきものぞ。⁽²⁰⁾

として、古歌に示される皇国固有の真情が目標とされる。これは真淵の「あはれあはれ、上つ代には、人のこゝろひたぶるに、なほくなむ有れる」(「歌意考」⁽²¹⁾) という認識の継承といえよう。光平は更に、歌の題は「事」「景」「情」の三種であるといい、「意趣(趣向)」については「心の趣くま、を持ち回らず、つくるはず、たゞ有りに詠」むことと「心気を高逸勇壮なる方に止め、仮にも物事に束縛」されないことを説く。ここでも真淵の「雄偉流暢なる歌」の復古が讃えられる。その他「言辞」については「俗語を去り徒言をすて、縁語配当の苦悩をはなれ、言掛にたゞよはず、規矩にからまれず、磊落自在によみ出づるべきことなり」として歌の「法則」よりも「骨目」を重視し、「声調」では上古の五七調の堅守と「緩急」「軽重」「柔軟」「遅速」の弁えを強調し、その上で歌の「生活(意気と語勢の相応)」「精神(余韻・余情)」を重視することを説いている。なお光平が諸平の歌友飯田秀雄に学んだのは天保九年のことで、同十年の冬には紀州に諸平を訪ねている。その後諸平とは天保十三年・弘化三年に交流があり、弘化三年には共に河内の諸陵を巡拝している。⁽²²⁾『稲木抄』は嘉永二年に「稲葉国」の飯田秀雄、「木の国」の加納諸平の「かぎりなき御恩頼を弥遠長に忘れれじ」⁽²³⁾として纏めたものであり、天保期の柿園派歌論を最もよく窺える書である。

右のような柿園派の歌論に千広が引かれはじめるのは、やはり天保期以降と思われる。千広が諸平に影響を受けたことは先学諸氏の指摘するところであり、⁽²⁴⁾以下に示す『随縁集』所収の「千鳥」の歌二首及び評はその端的なものである。

夕羽振波かぜあれて隼人の

さつまのせとに千鳥なくなり

豊頼云、千鳥の歌にては縣居翁の、夕されば海上かたの沖つ風のひゞき雲ぬに高く聞ゆるをいち速き、詞の勢

は此左津摩の瀬戸またたぐひなしと云べし。

忠敏云、雄偉非凡。

吹ほどは松にまぎれて須磨の浦

風の絶間に乳鳥なく也

此歌は大平翁の門に入り初て二とせばかりほどの歌なり。翁はいと面白しと賞翫ありしを、諸平は語はざりき。そはいかにといふに、翁は鈴屋につかれて持法に教へられしを、諸平は石原正明が説を諾ひて、如此の風調をよろこばざりしゆゑなり。此うた、吹ほどは松にまぎれてといひ、風のたえまといひ、上下よく掛合て全く鈴屋の風調なり。……さて此須磨の千鳥は、いはゆる棧不離位底の作意にして、薩摩の瀬戸にさし次て学べきものならず、ふと昔のしゆばれてなん。⁽²⁵⁾

鈴屋風の「掛合い」を嫌う加納諸平の姿勢に従い、千広自身「薩摩の瀬戸」の方を語勢のあるものとして認識しているのである。他にも『随筆集』では諸平の評を諾う姿勢が随所にみられ、諸平もまた千広を良き歌人として評価している。

さて前述のように柿園派では、真淵に見られるような皇国の真情、「高逸勇壮」な心が強調されるが、一方で彼等の目標はこれらの真情・心気が「時風のよき歌」として展開することにあつた。『稻木抄』では、

世に万葉風・古今体・新古今家など、いひたて、……各自臂を張り、爪を弾きて諍ふめれど、何事も其の時々々の自然なる風骨有りて、世を換えてはいかさまに学び出で、も、学びうべからぬものなり。故万葉集には万葉集の風格有り、古今集には古今集の風骨有り、真古今集には真古今集の風致有りて、自然の其の時世々々の体裁の分れたるをもて（其の姿は模すべし。其の気骨は模すべからず）己が時世の風に従ふべきことはさとるべし。⁽²⁶⁾

として、「時世」の認識に基づいて「己が時世の風」に従うことを説いている。また同じく光平の『垣内七草』（嘉永三）でも、

世の中の移りゆくまにまに、万の事も物もつぎつき変りもて行くなる、そは時運の流行の然らしむる業にて、え止むべからぬ自然の勢なりけり。和歌も亦然ぞありける。かれ代々の撰集の歌等、靈幸ふ神代の大御風を始として、万葉集・古今集・語撰・拾遺等の世々の撰集、さらぬ近頃の歌集どもに至るまで、咸その世々の風格の差別ありて、上古は、意も、辞も、調も、上古なり。中古は、意も、辞も、調も、中古なり。後世は、意も、辞も、調も、後世にて、そを如何さまに学ぶとも、世を替えては学び得べからぬものにて、こは学び得たりと思ふも、猶よく見れば贗物にて、真の物にくらぶればその差別いとかなしかし、か、れば歌よまむと思はむ人、先づおのが時世の風格をよく心得て、世の人情に協へらむさまをば、詠出づべきものぞ。⁽²⁷⁾

として、ここでも万事が「時運の流行」によって移り変わることは「止むべからぬ」こととした上で、世の人情に訴える「おのが時世の風格」を心得ることが主張される。柿園派の歌論は「天保調」と称され、当時の歌人の登龍門的な色彩をも有した『類題鯁玉集』の撰にも実践された。なお本居内遠は柿園派について、「つまる所は、意の急迫なるを強しと心得、句はしりのよきを優也と心得たる少々の転訛より、終に一風をなし、当時の流行体となり候……此体もし歌の真体ならば、歌はさらに小生がしたふ所にはあらず、忽所に捨申すべし⁽²⁸⁾」と酷評している。紀州藩の『紀伊統風土記』や『紀伊国名所図絵』の編纂事業、更には藩の国学所創設に尽力した内遠と諸平が、「歌学び」においては、鈴屋風と新風とで意を異にしていたことが解る。

柿園派の「時世」を重視する立場は、当然の事ながら千広の歌論にも反映している。『随縁集』では千広は、

歌の格調世々に変れり、……これ歌のみならず、服色制度皆しかり。文化年々盛りなれば、風体沿革あやしむにたらず。⁽²⁹⁾

といい、あるいは、

抑風体の変化は和歌のみならず。万般皆然り。服色制度すら時々変革ある例なれば、まして人情より発起して詠吟心を慰むる歌にして、調格豈変らざる事あらん。されば万葉の古言も、代々ふるまゝに神さびて人情にあはざりけん。古今集に至りて歌の風体一変したれば、長歌も風調を変じて今めかしく作られしものなり。……物なべて変わりゆく世の習なればひたぶる古を執して時勢を省ざるは狭く頑なる癖と云べし。³⁰

と述べ、五七調から途中七五調に転じる自作の長歌の調べを肯定している。ここでは五七調の堅守を説く柿園派からの千広独自の展開もみられ、千広において「時勢」が一層重んじられたとすることができる。

すなわち千広は太平に就いて「歌学び」を始め、「掛け合い」「縁語」を重んじる鈴門の歌風を学んだが、ほどなく「時勢」を重視する諸平に感化され、それを自らの歌論にも展開させたのである。筆者はこのような「歌学び」の営みの中に、彼の卓越した歴史思想が形成される要因が潜在していたのではないかと憶測する。

四、千広の神観

次に千広の神観念について考えてみたい。残念ながら千広は纏った古道論を著していない。加納諸平に関する「諸平は歌はたくみなれど学は広からず。是も神代にはうとし³¹」という本居内遠の評価によっても、彼らの学問の中心が「歌学び」にあり、古道論をはじめ広く国学全般に渡る学問への志が薄かったという印象が強い。一方、本居内遠においても藩主の命をうけて献上した『古学本教大意』に本居宣長の説を祖述したに過ぎない以上、宣長の望んだ「道の学問」の発展が本居派国学（ここでは「歌学び」を中心とする学問と定義する）において顕著でなかったことは明らかである。しかしながら本居派において「道」の学問が軽視されたと即断することはできない。例えば本居太平は、

安田広治に宛てたと思われる書簡（文政四年十一月十日）において、

大平が著述いまだ一部も上木せざるは、大平が拙キト、一ツニハ仕官ノ身ナレバ暇ノ少キと、又一ツニハ何ンぞ（纏）りたる書をまづ先へ出したく思ふと也……なかなか著述所でなく、人ノ為ニ骨折、一生ノいとまを費し候事也。……しかるに、さすがに故翁の膝本ニ凡四十余年附そひ候内、作りたる歌と文とハかずかずつもりたる也。

其外ニも、歌集文集を先づ一ばんニ上木せん事くちをし、道の書をと心がけて、むなしく日をおくり、月をおくり、年をこえし也。⁽³²⁾

と胸の内を吐露している。側用人格に拔擢されて和歌山藩の文化事業に積極的に従事し、「故翁ノ医術に歩行ナドセラレタルヨリハ暇ノアル方」だが、一方で諸国から歌文の添削や序文を頼まれ「医学ナキ医者のはやり医者の如」く雑務に追われる毎日が大平に課せられていた。更には文化十一年以来の平田篤胤との『三大考』論争が、古道論刊行の遅延に拍車をかけていたであろう。それでも鈴屋学統の継承者として「道の書」の執筆にこだわり続け、公務雑務に紛れる口惜しい日々を送ったのが大平であった。⁽³³⁾

さて前述のように千広の神観を知る纏った著述はないが、歌集や随筆に散見する記述をたよりに考察を試みてみたい。

石毛忠氏が千広の『三転考』にみられる歴史思想に「不可知論」と「現実的応変主義」の二つの構成要素を指摘されたことは後述するが、神観を考察する上でも貴重な指摘であると思われる。まず不可知論については、千広の歌集にみられる、

測しることならなくに神のうへを

口にまかせてひ、らくなゆめ。⁽³⁴⁾

という歌に象徴されよう。これは熊野神倉社に詣でた折に、

此社に年毎む月六日の夜御祭（註、現在の御灯祭）あり。遠近より願事あるもの集りきて、手毎に松ともして此拜殿に屯む幾百人とも数へもあへず松の火を振たつれば、殿内さながら火となれど、あやまちていさ、かも焼たる事なしといふ。かく祭終て坂を走り下る。かの壁たつ石畳を幾百人後れじとはしり下れば、足の踏処をさだまらでたゞ飛が如くなれど、是もまたあやまちて、倒れ疵など受たるものなしといふ。神事は猶かしこかりけり。理の外なる事なむある。⁽³⁵⁾

として、神事は「理の外なる事」として畏み尊ぶ姿勢からも窺うことができる。また二十代に著した紀行文「幣帛袋」で、

いかなる神とも知かたけれど、瑞垣の久しき時ゆ此所をしめ給ふ神にておはしませばいと尊し。すべて御名聞えぬ神をしひて考え得むとすなむいとをこなり。⁽³⁶⁾

として極力神々を論うことを回避する姿勢にも現れている。またこのような「不可知」の立場は加納諸平の以下のような言論にも見出すことができる。

靈ちはふ神代より今にいたるまで、世中にあとある万の事ども、人の力もておしはかりがたきなむ、いとおほかりける、そが中にも、神の御上は、ことにあまたあれば、さかしだちてとかくさだしことわりなどせんは、いみじきひが事にこそ、たゞありのまゝにいひつたへかきつたふるこそ、真の道にあるべかめれ。⁽³⁷⁾

ところで千広のような姿勢は、自らの神道論の展開を安易に回避したことを意味するのであろうか。歌集『隨々草』には次のような記述がある。

近頃西洋の教意や、浸透するにいたり、これによりて神を説くもあめり。彼は彼、我は我、何をくるしとてか思慮を煩すらん。畢竟、依様画猫兒其威を増さんとして其威を減す。ふかく心すべき事なりかし。⁽³⁸⁾

「西洋の教意」はキリスト教や天文学を指しているのであろう。そのような説を援用して神を論ずることは「仏説

に倣ひて神をとぎ、千般附会して得たりとす」のと同じであり、神威を減ずることになりかねないという認識があった。そして神の論いを「ふかく心すべき事」として自身にも強く戒めたのである。千広のこのような立場は、

知れぬ事はしらずしてあらむと思ひ定むれば、三大考靈の御柱は無用長物たるべし。漢学仏学於蘭陀学もひろく学びて、たゞ皇国の道の比ひなくすぐれたるゆゑよしをぞしるべき。さるはすべて測量の精細き学びもいひもてゆけばその功益なき物なり。人の体を解て見たりとても、難癒き疾病をことごとく直し止むべき術もあるべからず。日月星の運行遠近を度り得たりとても、風雨寒暑をねがふま、になすべくもあらねば、すべて物の理を究めむことは智術のさかしらることにて、神の道を学ぶには益なき事なりとしるべし。³⁹⁾

という本居大平の認識にも通じていたと思われる。

次に「不可知論」の立場とともに、「現実的応変主義」と呼ぶべき神観を備えていた。例えば『三の山踏』（明治三年成）で千広は次のように述べている。

高倉下の御社に、

いましめのよしありとても国民を

助くるわざは神もみちびけ

かく詠るは此所にくさぐさの禁あり、……其一つふたつをいはゞ、牛に荷負す事をゆるさず、養蚕する事をいましむなど猶くさぐさあり、殊に牛荷は此あたりのみならず、藤白は熊野の一の鳥居なりとて夫より南有田日高の両郡も牛に荷を負す事なし、此習いと上代の事とも覚え、思ふに中昔仏法盛にして杜家といふも多くは僧侶なれば慈悲の余りにてさる禁制も出こしか、……中昔の世には藤白権現を始として九十九王子の杜継々立栄え其間の人民あふぎ畏みしさま此一件にても思やらる、さはいえ今かく文明の御世としてさる禁を立置む事は琴柱に膠し舟をさぎむにひとしく愚にかたくな、るわざなればかゝる禁をゆるさむ事ぞ中々に神の御心にも叶ふべく思ひ

つ、神官の人々に勧むるよしもあればかく詠て地主の神に祈乞し也、⁽⁴⁰⁾

またこの熊野詣の折り、宇久井という浦辺の家で昼食に芋の飯を出され、この春重い病にかかつて回復しがたかつたのを、かの「ほうといんくすし」⁽⁴¹⁾のハムと牛肉を食せよという助言を疑い半分に行行し、険しい山路の旅ができる程に回復したことを思い出している。

昔われ世にありし時民のしつかさに有しかば常に此熊野の米に乏しきを歎きてさまざまこころを尽し、を、今食養米に限らざる事をしりてはさきの苦心と工夫異なり、因りて思へば万の事一隅に局るべからず万国各勝事ありひろく見ひろく聞て文明の道開くべし、さきに西洋人と云題にて歌あまた詠し中に、「外国のよきわざとりて我國のわざと遣ふぞ御国ふりなる」となむよみたりしか、昔をいへば儒仏莊嚴の国なり、今また西洋の道ひらけて益事物盛なるべし、儒にのみ執し仏にのみ着し、乃至国学にのみ固滞せば大業遂になるべからず、

神代卷に云素戔嗚尊曰韓郷之嶋有金銀、若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也、乃拔鬚髯散之即成杉、又散胸毛是成松、尻毛是成椋、眉毛是成櫟樟云々とありて後に神功皇后三韓を治賜ひ金銀は更なり儒仏其他種々の道も来りて鎮長に行はるるもおもへば其根本素戔嗚尊の御心に起れり、是によりて考ればいづれの国まれ其よきをとりにてこれの用と為す事は神の御心もさる事なるを狭く頑なるは何事ぞや、⁽⁴²⁾

『書紀』神代卷の素戔嗚尊の中津国での御業傳承の段（第五の一書）をもとに、諸外国の文化を広く取り入れることを「神の御心」として肯定的に受けとめる姿勢である。論の中心が国の「大業」にあり、決して「神のうへ」に及んでいないことに注意すれば、先の不可知論の立場に矛盾していないことが明らかである。このことは高倉下社で「国民を助くるわざ」を導き給うことを祈り奉る姿勢からも窺われる。

このような千広の「現実的応変主義」という神観の形成要因については、まず千広自身の生活意識の側面と、いま一つには時代的な外面的な影響の側面が考えられる。

右の二つの事例は共に熊野地方の農民の困窮を目の前にしてその救済策を模索したものであり、田辺蟄居以前に藩財政の中樞を担った者としての、即ち経世家としての生活に培われた要素であろうことは想像に難くない。しかしここで千広の時代的外面的な状況の側面を考えてみたい。

手掛りとなるのは千広の素戔鳴尊観である。彼は素戔鳴尊を諸外国の「よきをとりてこれの用と為す」神格を備えられた神と捉えているが、このような認識は文化文政以降の国学者に少なからず見られる。例えば平田篤胤は『玉たすき』(六之巻)の中で、

さて外国の参来る因縁は。かく荒御魂。枉津日神の御心に因る事なるを。本より悪き御心にて。悪事を為給ふに非ず。好き御心にて。皇美麻命の御為に。善からむ事をとて物し給ふなれど。(其は上に引る須佐之男命の。韓国之鳥云々の御言を。よく味ひ弁ふべし。)その善事の中に悪事いつぎ。悪事の善事にいつぐぞ。此の大神(天照大御神)の幸へ給ふ恩頼の驗なる。⁽⁴³⁾

として天照大御神の恩頼を論じつつも諸外国の事物伝来の起因を素戔鳴尊の伝承に求めている。また伴信友も、まづ神代に、須佐之男命、天照大御神に申して、高天原より御母の坐ませる根国に適給ふとして、御子五十猛を帥で、まづ韓の新羅国に天降坐し、曾尸茂梨といふ地におはして、……後皇国へ出雲国に帰り渡り給ひて、韓くにの島は金銀ありもし吾子に知しめさむには、其船材に用ふべき杉と櫂樟とを成し給ひたる由、日本書紀神代卷の中に見えたり、これぞ後の御世におよびて、韓の国々を言向け給ひ、遂に外国もろもろの服従ひ参渡り来ぬべき因になむありける。⁽⁴⁴⁾

といい、『仏神論』では「仏法ノ広マレルモ本ハ神ノ御心⁽⁴⁵⁾」と説いている。更に本居大平は『古学要』で、
かけまくもかしこきすさのをの命、から国の島には金銀あれば、わが国にうきたからなくてはたよりあらじとのりたまひて、木をうゑて船ををしもつくる事はじめおき給へるは、即とりも直さず万のから国の物はみなわが国

のつかひたまふべき御心なりけり。あなかしこあな尊神の御心を思ひかしくみて、ちいさくせはくあらそふこ、ろはおもふまじきなり。⁽⁴⁶⁾

として「万のから国の物」とりわけ儒仏二道の受容を肯定的に捉えている。

本居宣長以降の国学者のこのような認識は、国学者それぞれの個性に起因する側面とともに、多分に時代的影響に依るものと思われる。⁽⁴⁷⁾ 大平は『古学要』で次のようにいう。

明和安永の頃まで、わが古学の人々の儒道仏道を論破することあるを聞て以の外の如くおもひ、異端の道を行ふ輩などおもへりしを、近き寛政享和文化にいたりては儒仏の道をさんざん弁折するをあやしむ事なく、古学のともがらはわれ常の事なり、道理ありて儒仏の害悪をとがむるはさやうにあるべき事なりと上中下の人のあやしむ事なくなりたるも、道のまことのあらはれゆく次第なり。⁽⁴⁸⁾

大平は国学が「上中下」すなわち広く人々に浸透しつつある状況を感じていた。さらには江戸後期から幕末へと内憂外患の危機意識が漸次高まる時代状況の中で、「漢意」が払拭された後の新たな課題が彼らの間で認識されていたといえよう。してみると幕末から明治初期の千広の神観は、彼固有の原因による以外に、この時代の国学者共通の認識を継承したものであったことが理解できる。

五、千広の歴史観——むすびにかえて——

最後にこれまでみてきた歌論や神観と、『三転考』にみられる歴史観との関連について考察し、本稿のまとめとしたい。

『三転考』の冒頭千広は、神武天皇の御世から徳川幕府開幕までの「皇国の有状」が大きく三度変ったとして、そ

の三時代（上つ代・中つ代・下つ代）をそれぞれ「加婆根（骨）の代」（大化改新以前の氏姓制の時代）・「都加佐（職）の代」（鎌倉開幕以前の律令官職制の時代）・「名の代」（江戸時代に及ぶ武家政治の時代）と名付ける。その上で「かく変り来し状を考るに、自ら時の勢につれて、しか移来れるもの也けり」という時勢認識のもとに論が展開される。このような『三転考』の歴史観の特徴に不可知論的な立場を見出し得ることは先学諸氏の指摘するところである。それが端的に示されるのは、「骨の代」が官職制の受容によつて「職の代」に改まることについて叙述する部分である。

されば骨は上つ代の手ぶり、官職は唐さまをうつされたるものにて、皇国の古制廢れるは口をしきやうにも思ふめれど、つらつら考るに時勢の遷変る事は、天地の自なる理か、または神の御はからひなるか、凡慮の測しるべきならねど、畢竟人の智にも人の力にも及ぶべき事ならず。⁽⁵⁰⁾

時勢の変遷は「凡慮の測しるべき」ことではなく、「人の智」「人の力」の及ぶところではないというのである。しかしこれをもつて、千広の歴史観を運命論的・宿命論的史観と判断するのは早計である。右の叙述の直後に彼はこう述べる。

神功皇后韓国を言向たまひ、金銀を求め賜へるも、今こそあれ、当時皇国にしてかゝる大事業やある。されば仲哀天皇も疑ひ諾ひ賜はざりしを、もはら神の御諭をかしこみ賜ひ、武内大臣など、世に比類なき神傑あな、ひ助け奉りて、大事成就し賜へるをも、よく考れば、神武天皇より御世継々に、国大に開け、民益蕃りて、今は金銀乏しくては叶はぬ勢なりけむ。豈金銀のみならめや、教導の道もなくは、御政の便あしかりけむ。か、れば此外貢起るやいなや、やがて儒仏の道も参来て、そを深く用ひ賜へるも、みな止事をえぬ理にて、是はた神の御はからひとこそは仰ぐべけれ。儒仏の道開けずあらば、今も上代のまゝならんなど、慨むもさる事ながら、時勢は四時の遷るが如く、夏日の葛、冬夜の裘、いかでか一偏を固執せん。純一無欲の小児をよしとして、名利色欲熾

盛なる若人を教えんとすとも、勞して功なく、其教いてづらならん。故に古今の英主賢臣、時に応じ機に乗じ、さまざま思ひはかり賜ひし業は、其時世の勢を、深く考見るべき事にて膠柱の論は立べくもあらずなん。⁽⁵¹⁾

神功皇后が大陸に「金銀を求め賜うたことや、後に「儒仏の道」が我が国にもたらされたことは当時の「大事業」であり「神の御はからひ」として仰ぐべきことなのである。そして「古今の英主賢臣」が、時勢を考慮に入れて「業」を模索したことが讃えられるのである。これは「三の山踏」で「国民を助くる業」を「神の御心」に求めた彼の神親に繋がるものである。いわば時勢の中に神意を読み取り、肯定的に捉える姿勢が千広には存在したのであり、これが不可知論的な認識と対になって歴史観を構成していたといえよう。

ところでかかる立場を石毛氏に倣って「現実的応変主義」とした場合、千広が果たして日本の歴史の中に無限定な応変を求めていたのかが問題となる。例えば「骨の代」の叙述で「加婆禰」を諸外国に見られない「自なる皇国の制度」であるとし、⁽⁵²⁾また「職の代」では大陸の官職制を受け入れた時代でありながら「皇国は皇国として自然神代のことわり」が残存し、「大臣達をはじめ前君達」は「天津御神」「国津御神」の「御裔」であり、漢国のように「其家々の尊きは賤しくなるべき理」ではないという「国風」の相違から、撰関家藤原氏に「大御政」が留まったと述べている。⁽⁵³⁾また「名の代」の叙述でも、「名」とは、

神代にして、大名神・少彦名と称奉りし両大神は、国地広く領賜ひて、世を治賜へりし御名にはありけり。今いふ大名小名はし、遠く神代の例に習へるならねど其状はもはら同じくして、自らなる皇国の称号なれば、今これを称へて名の代とはいへるなり。⁽⁵⁴⁾

として、武士の社会が、神代に大名持神・少彦名神が「国地を広く領賜うた「状」と同じで、且つ「自らなる皇国の称号」である故に「名の代」と呼ぶのだと説いている。千広はこのように「三転考」の叙述の全般に渡って、「自らなる皇国」の在り方、あるいは「国風」を認めている。⁽⁵⁵⁾このことは彼が晩年『随々草』で、

抑儒仏東流して文明の化始て開けしより制度方法化にならざるものなし。ひとり神世より今のをつゝに伝えきて其道不変常住なるは、たゞ此和歌のみにして貴しとも貴きは此道なり。皇国人たらむからは、必ず学ぶべき道ならずや。……彼国振を執してそを学ぶ人たらんからは、我国語にも通達すべきことなるを、ふつに不沙汰なるは彼を執して彼に似ず、いと怪しく(55)なん。

と述べ、「国振」である和歌を尊ぶ姿勢にも反映している。また神を論ずるに際し「仏説」や「西洋の教意」を無批判に援用して説くことを「ふかく心すべき事」として戒める彼の神観にも貫かれていよう。

以上のように『三転考』の歴史叙述には「不可知論」の立場と「現実的応変主義」の立場とともに、日本歴史に潜在する「国風」の認識があつた。すなわち、時勢の変化は人の智や力の及ぶところではないが、そこに「神の御心」を感じ取つて肯定的に対応していくとともに、潜在する「国風」を認識して常に自らを省みる。これが千広の歴史認識における基本的な姿勢であつたと思われる。そしてこのような歴史思想が形成される上で、彼が青年期に「国振」の自覚から和歌を志し、天保期以降加納諸平の影響等によつて時勢認識に基づく歌論と詠歌を心がけるに到つたことや、彼の神観が大切な要因となつていたと推測することは、強ち飛躍した見解とは思われないのである。

註

- (1) 伊達千広(享和二—明治一〇)は幕末期の紀州藩士で一八歳の時(文政二)当時藩からの依頼をうけて『紀伊統風土記』の編纂にあつた本居大平について国学と和歌を学んだ。文化一三年一五歳の時、紀州藩第十代藩主徳川治宝の小姓として出仕し、以来治宝の信頼と家老山中筑後守の知遇を得て、三七年にわたり藩政に登用され大番頭格として勘定吟味役を兼ねた。嘉永五年、治宝が死去するに及び失脚し、田辺に蟄居、文久元年に赦免されるまで九年の幽囚生活を送つた。その間従来罵倒していた仏教へ心を寄せるようになり、晩年は実子陸奥宗光のもとに身を寄せ、和歌と禅に力を注いだ。

明治一〇年、七十六歳で生涯を閉じている。

伊達千広の伝記的事実については高瀬重雄『伊達千広』創元社、昭和一七、杉中浩一郎『伊達千広と田辺』『くちくま』二四、一九七四、三好國彦「嘉永五・六年の紀州藩政変―伊達宗広（千広）の失脚をめぐる―」『南紀徳川史研究』三、一九八八、等を参照。

- (2) なお明治期に『三転考』に着目した小中村清矩は（国文学研究資料館蔵の六石山房蔵板『大勢三転考』（三冊、明治六）には、「東京帝国大学図書印」「南葵文庫」「陽春廬記」の印、「明治十二年四月三日雨窓泛讀了陽春廬」の朱筆がある）、上古の官制の考察の中で千広の「加婆禰の世」の説を紹介し（『制度沿革史』勉強堂、明治三四、四二頁）、池辺義象も氏・姓の解釈に他書と共に『三転考』を引いている（『日本法制史』博文館、明治四五、三二五頁）。『三転考』が明治期に法制研究の書として受け入れられていたことが解る。

- (3) 内藤湖南「白石の一遺聞に就て」『内藤湖南全集』第九卷、筑摩書房、昭和四四、三五二頁。

- (4) 松本彦次郎「日本史学名著改題」『史学名著改題』共立社、昭和六、一三八―一四二頁。

- (5) 坂本太郎著作集五『修史と史学』吉川弘文館、平成元、一六二頁。

- (6) 『大勢三転考』に関する研究には、千々和實「大勢三転考」に於ける史観』『史潮』二二、昭和七、高瀬重雄『伊達千広』、森田康之助『伊達千広と伴信友』『神道学』三三・三四、小沢栄一『近代日本史学史の研究幕末編』吉川弘文館、昭和四一、松本三之介『近世における歴史叙述とその思想』日本思想大系48『近世史論集』岩波書店、昭和四九、荒川久壽男『伊達千広の『大勢三転考』について』『皇学館論叢』一三二・一三六、昭和五五、石毛忠『大勢三転考』における時代区分法とその思想的根拠』石田一良編『時代区分の思想』ぺりかん社、昭和六一、等がある。

- (7) 前掲、三九五頁。

- (8) 前掲、六一一頁。

- (9) 同、六一五頁。

- (10) 前掲、一八三―一五頁。

- (11) 同、一九三頁。

- (12) 『随々草』上巻、陸奥広吉編『伊達自得翁全集』（以下『全集』と略）文祥堂、大正一五、一〇〇―一二頁。

- (13) 東京大学本居文庫蔵。
- (14) 陸奥広吉編『伊達自得翁全集補遺』(以下『全集補遺』と略) 昭和一五、一一―二頁。
- (15) 『国学者伝記集成』名著刊行会、一九六七、一三三五頁。
- (16) 堀内信編『南紀徳川史』第二冊、清文堂、昭和五、五四―二頁。
- (17) 『全集』、五二―頁。
- (18) 最晩年の明治十年、千広は税所教子・飯田年平とともに宮中歌御会始に召歌詠進の榮を蒙り、「ひさ方の天にたゝへる君か代をまつは常磐のいろにみせけり」と詠じ奉った(『明治天皇紀』第四)。
- (19) 佐佐木信綱編『伴林光平全集』湯川弘文社、昭和一九、一四―三頁。
- (20) 同、一〇―八頁。
- (21) 日本思想大系39、『近世神道論・前期国学』岩波書店、昭和四七、三四―九頁。
- (22) 「光平略年譜」『伴林光平全集』、一九―二〇頁、山本嘉将『近世和歌史論』文教図書出版、昭和三三、三二―三頁。
- (23) 山本前掲、一九三―四頁。なお後に光平の歌論は、安政四年の諸平の死や諸平に繼いで紀州藩国学所総裁に任じられた事を契機に独自の展開をみせるにいたった(中村一基『伴林光平の「菅家遺戒」』『和魂漢才』説受谷)『本居派国学の展開』雄山閣、一九九三)。
- (24) 森敬三前掲、三五―五六頁、山本嘉将『加納諸平の研究』、昭和三六、一六一―頁。とくに山本の著書には、諸平や柿園派歌論について学ぶところが多かった。
- (25) 『全集』二八―八頁。
- (26) 前掲、一〇―九頁。
- (27) 同、一四五―六頁。
- (28) 山本蔵書簡、『近世和歌史論』、一九二―頁。
- (29) 『全集』二九九頁。
- (30) 同、四三〇―頁。
- (31) 『国学者伝記集成』、一三三―三五頁。

- (32) 梁瀬一雄「本居大平書翰集(三)」、『愛知淑徳短期大学紀要』二七、一九八八、七頁。
- (33) 高倉一紀「本居大平晩年の動向」、『皇学館大学神道研究所所報』三九、平成二、四頁。『三大考』論争については中西正幸「三大考以後」、『国学院雑誌』七四—一、昭和四九、参照。
- (34) 『全集』、四二二頁。
- (35) 『全集補遺』、八六頁。
- (36) 同、四頁。
- (37) 「おかけまうての日記」序、増訂再版『本居宣長全集』十一卷、吉川弘文館、昭和二、五七九頁。
- (38) 『全集』、一六七—八頁。
- (39) 本居大平『古学要』、増訂再版『本居宣長全集』十一卷、二六二頁。
- (40) 『全集補遺』、七七—八頁。
- (41) ボードウインはオランダ陸軍軍医で、明治元年大阪医学所医員、明治三年には東京大学東校に臨時雇教師として赴いた(板橋倫行「開明的国学者としての伊達千広」、『日本歴史』七八、昭和二九を参照)。
- (42) 同、九四—六頁。
- (43) 新修『平田篤胤全集』六卷、名著出版、昭和五二、三四〇頁。
- (44) 『中外経緯伝草稿』第一、『伴信友全集』三卷、ぺりかん社、昭和五二、一七四頁。
- (45) 『伴信友全集』五卷、二二〇頁。
- (46) 前掲、二五四頁。
- (47) 津田左右吉『文学に現はれたる国民思想の研究』四卷、岩波書店、昭和三〇、四五七—八頁。
- (48) 前掲、二五八—九頁。
- (49) 日本思想大系48『近世史論集』、三八八頁。
- (50) 同、四一五頁。
- (51) 同、四一五—六頁。
- (52) 同、三八八頁。

(53) 同、四二六―七頁。

(54) 同、四三八頁。

(55) この点について荒川久壽男は「千広は」時代の底流に一貫する日本歴史の独自のポテンシャル・エナジーを想定してゐる」(前掲、一二頁)と指摘し、松本三之介は「千広自身の価値意識が、所々に首をもたげるのは当然のことであろう」(前掲、六二―頁)と述べている。いずれも『三転考』の叙述の特徴として触れられており筆者の見方に通ずるものと思われる。

(56) 『全集』九一―二頁。